地域プラス

神への意識変化映す

笑う「こま犬」の謎（京都市）

笑う「こま犬」がいるという。にわかには信じがたい。大方が思い浮かべるのは、神社の境内入り口に待ち構える、いかめしく威嚇するような顔だろう。神聖な領域に邪悪なものを寄せ付けないよう、にらみを利かせる神の使者がへらへらしているはずがない。真相を確かめに京都市内の神社を巡った。（樺山聡）

下御霊神社のこま犬。確かに見ようによっては笑っているように見える（京都市中京区）

笑うこま犬のうわさを聞いて下御霊神社（中京区）へ。こま犬は口を開けた「阿形（あぎょう）」と閉じた「吽形（うんぎょう）」で一対とされるが、神社門外の向かって右にある阿形を見ると、横に大きく開いた口。確かに愛嬌（あいきょう）がある表情で、「がはは」と笑う顔に見えないこともない。

境内で宮司さんに話を聞いた。264歩。「笑ってはいないでしょう」と、出雲路敬直さん(79)は笑った。

温かく迎え入れる存在に

熊野神社のこま犬。高笑い？（左京区）

宗忠神社の逆立ちこま犬。熱烈歓迎？（左京区）

宗忠神社の柴犬コロ。こま犬気取り？

安井金比羅宮のこま犬。市内最古という（東山区）

台座に「嘉永七年」とある。1854年、江戸末期だ。寄進者とみられる名前も刻まれているが、詳しい経緯は分からないという。「境内のこま犬の中では一番柔和な表情ですね」

数年前から「笑うこま犬」としてインターネット上で話題に。そこで神社は今年1月、こま犬絵馬を1枚600円で発売した。「思うほど売れてないんですけど」。宮司はまた笑った。「きっかけはどうあれ、信仰への理解が深まれば」と喜ぶ。

1318歩。丸太町通を東に歩き、熊野神社（左京区）に着いた。ここも阿形が大きく口を開いている。大きな歯、太い前足。健康的な高笑いが聞こえてきそうだ。台座には「天保八年」。1837年、時期は下御霊神社とほとんど変わらない。

「時代がたつにつれ、こま犬の表情は豊かになります」。こま犬に詳しい龍谷大名誉教授の小寺慶昭さん(66)＝宇治市＝は話す。平安時代から対で置かれていたこま犬が、今のように参道に置かれるようになったのは江戸時代からという。もともとは、どう猛な表情をしていたが、「天神様」が「天神さん」に変わるように神への畏敬の念が親しみを帯びるようになった。同時に、こま犬も参拝者を温かく迎え入れる存在に変化したのではないか。小寺さんはそう考える。

「逆立ちするこま犬がある」という宗忠神社（左京区）へ。4625歩。本殿に続く長い石段を少し上がると姿を現した。阿形、吽形ともに見事な曲芸。思わず頬が緩む。明治44（1911）年の寄進と新しい。祭神が備前国（現・岡山県）の生まれだからか、備前焼でできている。つらい体勢に耐え、こわばった笑みを見せながら熱烈歓迎してくれているようで、けなげでさえある。100年前の遊び心を感じた。

5026歩。石段を上りきった。セミの鳴き声。この夏初めて耳にした。膝が笑うほどではないが息が切れ、汗をぬぐいながら前を見ると、1匹の白い犬と目が合った。雄のコロ。もらい手がなく、生後間もなく殺処分にされそうだと親戚から聞いて、禰宜（ねぎ）の中山みや子さん(63)が引き取った。すると忠犬ぶりを発揮。「不審者には猛烈にほえるので、さい銭泥棒がいなくなった」。9歳の今も、毎日の散歩では石段途中のこま犬の横で立ち止まり、眼下をにらんでしばらく動かないのだとか。まさに「生きたこま犬」。主人が頭をなでても涼しい顔だが、心の中では満面の笑みなのかもしれない。

東大路通に戻り、祇園祭を迎えている八坂神社（東山区）へ。8901歩。ここにはたくさんのこま犬がある。石段途中にあるこま犬の阿形は大きな口に鋭い歯、鋭い眼光、張り詰めた胸筋。阿形は本来ライオンがモデルというが、まさしく獅子そのものだ。一方、商売繁盛を願う境内の蛭子社の阿形は口がハート形に開き、ユーモラス。こま犬の表情の豊かさを教えてくれる。

10192歩。安井金比羅宮（東山区）に着いた。ここに現存する市内最古のこま犬がある。明和4（1767）年の寄進という。口を横にまっすぐ開き、素朴な味わいがある。縁切りを願う人を引き寄せる強烈な場所だからこそ、逆に穏やかな表情が刻まれたのだろうか。先人の込めた思いを知るすべは今はない。

こま犬の顔に笑いを見るか、怒りを見るか。それは相対する私たちの心のありよう次第かもしれない。

メモ　小寺さんの著書「京都狛犬（こまいぬ）巡り」（ナカニシヤ出版）によると、参道にあるこま犬は江戸時代の大衆文化の中で現れた。その後、大阪、京都で登場する。以降、地域ごとにさまざまな特徴が生まれたが、戦前に政府が形状などの統一基準を示し、画一化が進んだ面もあるという。